

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：17701

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K17560

研究課題名（和文）遠隔地在住のため面会が困難な母親への愛着形成ツールの開発

研究課題名（英文）Development of attachment formation tools for mothers who are difficult to visit because they live in remote areas

研究代表者

田中 一枝（TANAKA, KAZUE）

鹿児島大学・医歯学域医学系・助教

研究者番号：00806804

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：模擬面会・情報伝達ツールを利用することで母親は、リアルタイムで子どもの様子や成長を見たり聞いたりすることが可能であった。一緒に生きていることを実感し、自身の気持ちが救われていた。そして家族と共有することで新しい家族の一員として早く迎え入れたいという思いになっていた。さらに看護職者とやり取りをする中で、看護職者との絆の深まりを感じている様子がみられたことから、看護職者と母親の信頼関係構築にも影響を与えたことが明らかとなった。

結論：模擬面会・情報伝達ツールはリアルタイムでのやりとりが母親に子どもへの思いに影響を与え、看護職者との信頼関係にも寄与する可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究においては、NICUに入院する児を育てる母親にとって、模擬面会・情報交換ツールを用いることで、母子分離期間中においても、遠隔地域に在住していても子どもの様子をリアルタイムに変化を見たり聞いたりすることで愛着形成に影響があったことが考えられた。母子分離下でも母親が子どもを見て安心できたり母親としての心を支えてくれることは、今後NICU管理下での母子愛着形成のケアの一助になることが考えられる。

研究成果の概要（英文）：Mothers were able to see and hear their children's appearance and growth in real time by using simulated visits and information transmission tools. Even though the mothers and infants were separated in reality, mothers were able to see their infants virtually. They experienced a sense of welcoming their child as a new family member by sharing pictures and movie clips with their family. It's also thought to have an influence on building a relationship of trust between nurses and mothers.

This tool can affect attachment between NICU infants and their mothers, and can also contribute to building a relationship of trust with nurses.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：NICU 愛着形成 ICT 遠隔 日記帳

1. 研究開始当初の背景

(1) 全国的な NICU 入院患者の増加と母児分離期間の長期化

早産児、低出生体重児をはじめ出生直後から高度な救命医療および看護が必要なハイリスク新生児の出生は増加している(筒井ら, 2014)。低出生体重児の出生率は、2016 年が全出生数の 9.5%(2014 年 9.5%)であり決して少なくない(母子保健事業団, 2017)。NICU に入院する児の平均在院日数は 40.8 日であり、長期的な治療を必要とする(厚生労働省, 2015)。そのため、家族は出生後しばらく離れて過ごさなければならない。母児分離状態で長期間過ごさなければならないことは、母親の心理的ストレスおよびボンディング形成の障害になる。

また、鹿児島県は日本一の離島人口を抱え約 10 万人であり、県内島嶼部での出生数は約 1,500 人で年間約 15 人が NICU に入院することとなる。また、県内へき地からは年間約 30 名が NICU に入院する。島嶼部やへき地からの面会は物理的にも移動に時間がかかり、経済的にも負担が大きい。

(2) NICU 入院患者の親の育児不安に対するファミリーセンタードケア

NICU に児が入院した母親は、産後うつ病が疑われる率が高かった(長濱ら, 2004)とされ、さらに、児の入院期間が 31 日を超える母親の EPDS 得点は、7 日以内の母親に比べ優位に高かった(神田ら, 2007)ことが示されており、母児分離されている状態が母親の育児ストレスが関係していることが示唆されている。母児分離状態における母親の育児不安の軽減のためのケアとしてファミリーセンタードケア(Family-Centered Care; 以下 FFC)を取り入れていくことの必要性が示されている。FFC とは、「子どもと家族の尊厳と多様性を尊重し、家族と医療者の良好なパートナーシップを基盤とした情報共有、意思決定支援、家族のエンパワメントなどの包括的かつ継続的なケアプロセス(浅井, 2003)」とされている。FFC の導入により、【親の不安軽減、養育能力の向上】【家族間の絆の形成・関係性の強化】【コミュニケーション・情報共有の促進】【看護実践に対するスタッフの肯定的意識・意欲の向上】などが挙げられ(浅井ら, 2015)、そのケアの一環として NICU 患者の様子を記した日記帳や交換ノートがある。

(3) 島嶼部やへき地等の遠隔地在住の家族へのファミリーセンタードケアの必要性

鹿児島県は島嶼部に県人口の約 10%が居住しており日本一多い。また、県域は南北 600 km と広範囲にわたる。NICU は鹿児島県本土の県庁所在地にしか存在せず島嶼部などの遠隔地に居住する家族が面会するのに、経済的・物理的な問題が存在する。そのような家族に対して、NICU に直接面会に来たときに提供される日記帳や交換ノートなどでの限界をスタッフも感じている。そのため、直接面会に来たときに提供できるケアではなく、遠隔地からも FFC を提供できるツールの開発が必要であった。

2. 研究の目的

離島などの遠隔地に居住する等の物理的な問題により面会を制限される NICU 患児の家族に対して、インターネット環境を通じて子どもの様子を見る(疑似面会する)ことができ、テキスト等での医療者とのコミュニケーション(疑似交換ノート)がとれる FFC のケアのツールを開発する。このことにより、母親の心理的ストレスの解消につながり愛着形成を促すことが期待される。また、模擬面会ツールの利用へのスタッフの考えを明らかにし、双方にもたらされる効果や課題等を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 具体的な内容

日記帳群と模擬面会・交換ツール群における母親の思いの比較

模擬面会・交換ツールを用いた愛着の評価

の 2 つの研究をこの研究では実施する。

研究の手順

【平成 30 年度】

- 入院期間が 1 週間程度と予測される児が入院した時に、日記帳の利用または、模擬面会・交換ツールの利用のどちらかが利用可能であることを提示し、選択してもらう。日記帳利用群と模擬面会・交換ツール利用群を研究対象者とする。
- 模擬面会・交換ツールとして、「Medical care station[®]」を使用する。
- 模擬面会・交換ツールの利用は同意取得後より NICU 退院までとする。
- 退院後 1 週間で ID は削除する。

【平成 31～32 年度】

- 平成 30 年度と同様に模擬面会ツールを使用する。
- 平成 30 年度の結果を踏まえて、アンケート項目を精査し、量的研究にて実施する。(アンケート内容が変更になる可能性があるためその際には再度倫理審査に提出する)

収集する方法

【平成 30 年度】

- 基礎情報に関してはカルテより情報収集を行う。(出生時の在胎週数、性別、入院期間、入院時の日齢、児の基礎疾患、母親の年齢、出産様式、家族形態など)
- 入院時、1・2・4・8 週目(退院した時点で終了)と児の退院後 2 週間、児の退院後 4 週間で愛着評価ツールを用いたアンケートにて評価を行う。アンケートに用いる愛着形成の測定ツールは母親と子どもが長期に離れている早期産児への愛着も測定でき、信頼性妥当性が確保されている「母親の愛着質問紙(MAQ)」(中島, 2002)を用いることとした。また、退院後 2 週間目に訪問により半構造面接を行い、ツール利用を通しての思いや、ツール利用状況についての評価を、アンケートをもとに詳しく調査する。

【平成 31 ~ 32 年度】

- 基礎情報に関してはカルテより情報収集を行う。(出生時の在胎週数、性別、入院期間、入院時の日齢、児の基礎疾患、母親の年齢、出産様式、家族形態など)
- 30 年度に行った調査をもとにアンケートを作成しなおし、アンケート用紙を用いて入院時、1・2・4・8 週目(退院した時点で終了)、退院後 2 週間、4 週間で行う。退院 2 週間、4 週間後にアンケートへの回答を依頼し、返信用封筒にて返信してもらう。

4. 研究成果

(1) 日記帳群・模擬面会・交換ツール群の母親の思いについて

日記帳群、模擬面会・交換ツール群に分けて、それぞれの思いについて半構造面接を行い母親の思いについて明らかにした。

日記帳群

研究参加者は 9 組であり、そのうち 2 組は児の状態により面接が実施できなかったため除外した。今回研究対象となった母親は 7 名であった。対象者の年齢は 20 代から 30 代で主に 30 代であった。児の入院期間は平均 25.4 ± 8.8 日であった。

NICU に入院した児が日記帳を使用した母親の思いを分析した結果、疾患による特徴は見られず、63 のコードが抽出され、13 サブカテゴリ、4 カテゴリが形成された。【空白の時間を少しでも埋められて心を前に押してくれた】【看護者の寄り添いに感動した】【自分に余裕がない中で子どもの記録として残してくれた】【成長した子どもに自身の頑張りや周囲への感謝を伝えたい】の 4 つでカテゴリが形成されていた。日記帳が果たす役割

として、子どもとの空白の時間を埋め、看護者への寄

表 1 日記帳を使用している母親の思い

り添いから不安が軽減していた。また入院生活を振り返り母親自身も心の整理ができるなどの重要な役割を日記帳が果たしていた。さらに、子どもの感謝の心を育てるツールとしても活用していきたいという思いを母親が抱いていることが明らかになっ

カテゴリ	サブカテゴリ
空白の時間を少しでも埋められて心を前に押してくれた	会えないときの様子が分かる
	子どもの成長が分かる
	子どもの頑張りが分かる
	自分の頑張りや原動力になった
看護者の寄り添いに感動した	看護者への信頼感
	親のように接してくれている
	自分の心が落ち着き安心した 子どもの様子を楽しく可愛く書いてくれている
自分に余裕がない中で子どもの記録として残してくれた	手元に残る思い出として記念になった
	思い出を重ねていきたい
成長した子どもに自身の頑張りや医療者への感謝を伝えたい	子どもが大きくなった時に本人の頑張りを見せたい
	支えてくれた医療者のことを伝えたい
	看護者や検査の写真があれば過去の現実を伝えることができ感謝の心を育てたい

た。看護者は母親の思いを理解した上で日記帳をケアの一環として作成していくことが必要である。

模擬面会・交換ツール群

研究対象となったのは、10 組であり、そのうち 1 組は想定より早く退院となったため除外し、9 組となった。対象者の年齢は 20 代から 30 代で主に 30 代であった。児の入院期間は平均 48.3 ± 12.2 日であった。模擬面会・情報伝達ツールを利用する母親は、リアルタイムでやり取りができることにより、子どもと今を一緒に生きていることを実感し、自身の気持ちや救われていた。夫や同胞、周囲の家族と共有することで家族の一員として早く迎えたいという思いになり、看護職者とも絆が深まり、信頼関係の構築に寄与していることが明らかとなった。看護職者は母親の思いを意識しながら支援する立場としてツールを利用することが求められる。

(2) 日記帳群と模擬面会ツール群での愛着形成ツールの比較

今回の日記帳群と模擬面会ツール群において、MAQ での評価の比較をマンホイットニーの U 検定を用いて検討を行った。

この結果より、日記帳を使用しても、模擬面会ツールを用いても、有意な差は認められず、模擬面会ツールを使用した場合においても、日記帳と同様の結果が得られることが推測された。

また、それぞれ、グラフのような結果となり、最終的には高い愛着度になったことがわかった。両群を比較したところ、表のような結果となり、有意な差は認められなかったため、MSC を使用しても、日記帳と同様の効果があることが推察された。

また、それぞれの対象者ごとに経時的变化をグラフで比べてみると、おおむね入院後 1 週間後において上昇している傾向があると推察された。

表2 日記帳群とMSC群でのMAJ-の比較

	検定統計量	p
入院時	175.5	0.45
入院1週間後	188	0.71
入院2週間後	168	0.22

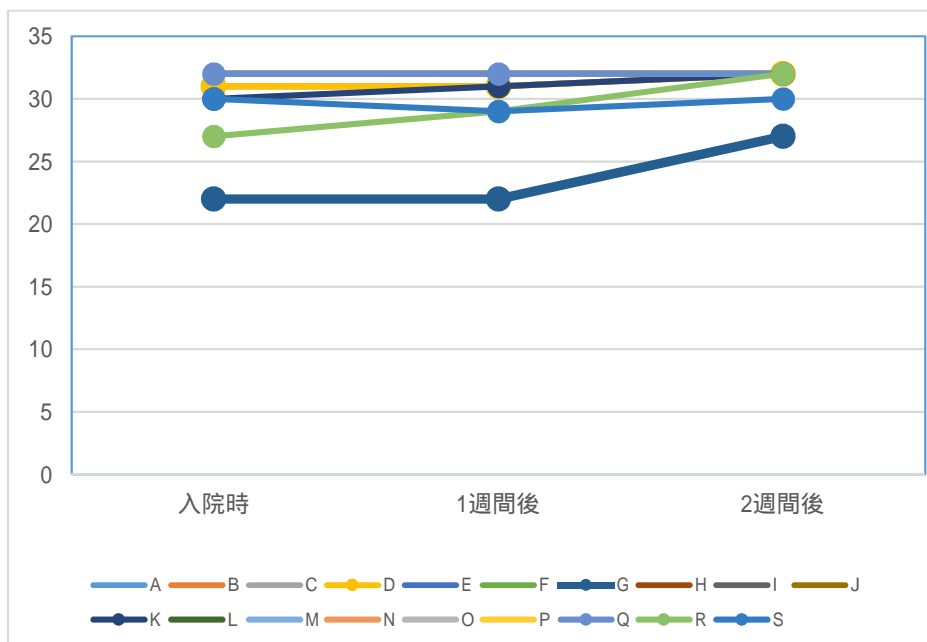


図1 日記帳群の MAQ の経時的变化

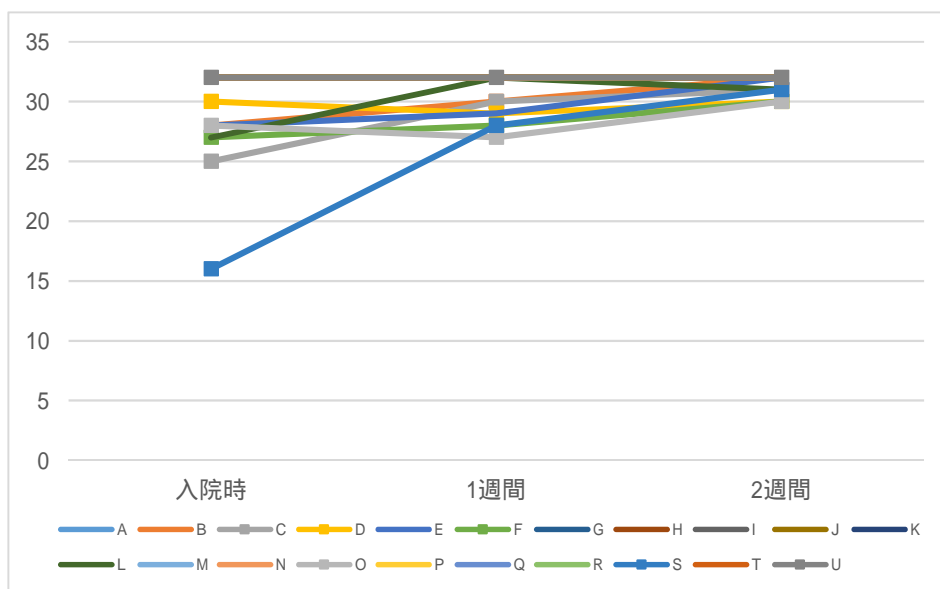


図2 模擬面会ツール群の MAQ の経時的变化

5 . 今後の課題

今後は、模擬面会ツールを利用する母親の経時的な思いの変化や、愛着形成・アタッチメントなどにどのように影響を与えるかについて調査していく必要がある。また、症例数を重ねて、児の疾患ごとの違いや、母親の基本属性の違いによる変化についてもとらえていく必要がある。スタッフに思いについては、実際に使用してみてどのように感じたか、または今後の活用法などについても明らかにしていく必要があると考える。

文献

田中一枝, 中尾優子, 山本直子, 有村夕加, 中山みゆき, 清瀬みき子, 根路銘安仁. NICU に入院している児へ看護職が綴る日記帳に対する母親の思い. 母性衛生, 2021, 62(2), 285-292

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田中一枝
2. 発表標題 NICUIに入院した児に対して日記帳を利用した母親の思い
3. 学会等名 第34回日本助産学会学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------